

## 論文以外のコンテンツ

雑誌名	「エコ・フィロソフィ」研究
号	7
発行年	2013-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00005070/">http://id.nii.ac.jp/1060/00005070/</a>



# Eco-Philosophy

Vol.7



**TIEPh**

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy



# 東洋大学『「エコ・フィロソフィ」研究』第7号

## contents

「エコ・フィロソフィ」の課題 竹村牧男 .....	1
TIEPh 活動組織.....	3
2012 年度活動内容一覧 .....	5
<b>I TIEPh 第1ユニット 自然観探究ユニット .....</b>	<b>7</b>
「環境倫理と宗教思想——仏教思想の課題について」 竹村牧男 .....	9
「環境教育におけるネイチャーライティングの意義 —「エコロジー的理性批判」(K.Eder) から」 関(山村)陽子 .....	21
「佐藤一斎における自然観と修養法」 野村英登 .....	39
<b>II TIEPh 第2ユニット 価値観・行動ユニット .....</b>	<b>49</b>
「環境配慮行動のコントロール感と平均以上効果」 大久保暢俊 .....	51
<b>III TIEPh 第3ユニット 環境デザインユニット .....</b>	<b>71</b>
「農のシステム」 河本英夫 .....	73
「理想の大地—福地の思想」 山田利明 .....	83
「チェジュ記——石と風と光へ」 河本英夫 .....	93
「イノセント・メモリー——身体記憶の彼方へ」 河本英夫 .....	103



## 「エコ・フィロソフィ」の課題

東洋大学学長 竹村 牧男

皆様には時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

今般ここに、『エコ・フィロソフィ研究』第7号をお届けします。東洋大学において、地球規模の深刻な環境問題に関する哲学・思想を追究する活動を継続して7年が経ち、この研究誌も7冊目を算え得たことは、日本の人文系の学界のなかにあつて、かなり貴重なことではないかと思われまふ。これもひとえに皆様方のご支援・ご協力の賜物と、深く感謝申し上げます。

思えば平成17年度、「サステナビリティ学」連携研究機構（IR3S）に東洋大学が協力機関として参加するにあたり、「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（TIEPh）を結成し、その活動を開始したのでした。IR3Sの意図は、超学際的な「サステナビリティ学」という新しい学問を構築しようという広遠・真摯な気宇にあふれたものでした。この新たな学問の構築という活動が、平成20年度までのIR3S終了後も、一般社団法人サステナビリティ・サイエンス・コンソーシアム（SSC）に引き継がれて継続されていることは、大変喜ばしいことだと思います。東洋大学もこれに呼応して、TIEPhの活動を継続し、特に平成22年度からは、文部科学省の「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に採択されて今日に至っています。この活動は5年間の計画で、今年度で2年間が経過したことになります。

この『エコ・フィロソフィ研究』の刊行は、したがって平成17年度より継続しており、今年度で7号となりました。この間、TIEPh主催で開催した国際シンポジウム、セミナーなどの記録も別冊にて刊行してきており、全体として環境問題に関する哲学・思想の展開のまとまった成果群となっていると思います。しかしもちろん、まだまだ十分とは言えませんので、今後の活動をさらに充実させていく必要があると考えております。

特に本来、「サステナビリティ学」の一環としての「エコ・フィロソフィ」の追究が目的でありますから、その哲学・思想の探求・究明は、真に地球社会の健全な維持を導くものでなければなりません。それには、一人ひとりに望まれるライフスタイルの基盤となるだけでなく、あるべき循環型社会等の形成を具体的に導くようなフィロソフィを、実際に提示できなければならないでしょう。最終的には政策提言につながるものにまで、鍛えていかなければなりません。そのためには、そのフィロソフィを社会科学と結合させ、その有効性を検証しつつ新たな哲学を構築していかなければならないと思っています。また、「サステナビリティ学」が超学際的学問をめざしたのと同様に、「エコ・フ

イロソフィ」もまた、科学・技術の本質を見きわめ、政治・経済の動態を吟味する等、超学際的研究を進めるべきだと考えます。

「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」としては、あと3年の期間が予定されており、この間にできる限り、この現代の地球社会に切実に求められている「サステイナビリティ学」の構築に寄与する成果をあげてまいりたいと思います。皆様には、今後とも種々ご支援・ご指導賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

## TIEPh 活動組織

Toshiaki YAMADA	Professor, Environment Design Unit Project Representative	山田 利明 代表（センター長） 環境デザインユニット
Takashi OHSHIMA	Professor, Values and Behavior Unit	大島 尚 価値観・行動ユニット
Hideo KAWAMOTO	Professor, Environment Design Unit	河本 英夫 環境デザインユニット
Makio TAKEMURA	Professor, Nature Unit	竹村 牧男 自然観探究ユニット
Kohei YOSHIDA	Professor, Nature Unit	吉田 公平 自然観探究ユニット
Ichiro YAMAGUCHI	Professor, Nature Unit	山口 一郎 自然観探究ユニット
Shin NAGAI	Professor, Nature Unit	永井 晋 自然観探究ユニット
Tahoko SAKAI	Associate Professor Nature Unit	坂井 多穂子 自然観探究ユニット
Kiyoshi ANDO	Professor, Values and Behavior Unit	安藤 清志 価値観・行動ユニット
Hideya KITAMURA	Professor, Values and Behavior Unit	北村 英哉 価値観・行動ユニット
Kazuyu HORIKE	Professor, Values and Behavior Unit	堀毛 一也 価値観・行動ユニット
Naoya SEKIYA	Associate Professor , Values and Behavior Unit	関谷 直也 価値観・行動ユニット
Yoshiaki IMAI	Research Fellow	今井 芳昭 客員研究員
Ayano TANAKA	Research Fellow	田中 綾乃 客員研究員
Rina YOKOUCHI	Research Fellow	横打 理奈 客員研究員



Ryo NISHIMURA	Research Fellow	西村 玲 客員研究員
Satoshi INAGAKI	Research Associate	稲垣 諭 研究支援者
Yoko SEKI(YAMAMURA)	Research Associate	関(山村) 陽子 研究支援者
Hideto NOMURA	Research Associate	野村 英登 研究支援者
Nobutoshi OKUBO	Research Associate	大久保 暢俊 研究支援者
Shinji MUTO	Project Research Assistant(PRA)	武藤 伸司 リサーチアシスタント
Dai IWASAKI	Project Research Assistant(PRA)	岩崎 大 リサーチアシスタント

## 2012 年度活動内容一覧

※TIEPh 研究員は下線表記

### 7月

---

- ・ ニュースレターNo.14 発行
- ・ 28～29日  
山梨県道志村視察（環境デザインユニット）

### 8月

---

- ・ 4～7日  
韓国済州島視察（環境デザインユニット）

### 9～1月

---

東洋大学の「全学総合授業」として「エコ・フィロソフィ入門」を開講  
**2012 年度 全学総合 IB『エコ・フィロソフィ入門』**

### 10月

---

- ・ 31日～11月3日  
サンシャインコースト大学視察（価値観・行動ユニット）

### 11月

---

- ・ ニュースレターNo.15 発行

### 12月

---

- ・ 15日

**TIEPh 共催 研究会（環境デザインユニット）**

「第四回人間再生研究会」

講演者：河本英夫、花村誠一、保前文高、後藤晴美

総合司会：岩崎正子

講演会司会：稲垣諭

場所：東洋大学 白山キャンパス 6号館 6309 教室

## 2月

---

・24日

### TIEPh 主催 シンポジウム（自然観探究ユニット）

「円了×熊楠—近代日本のエコ・フィロソフィ」

特別講演者：鎌田東二

報告：野村英登、岩井昌悟、中島隆博

司会：永井晋

場所：東洋大学 白山キャンパス2号館 スカイホール

## 3月

---

・「エコ・フィロソフィ」研究第7号、第7号別冊発行

・8日

『エコロジーをデザインする——エコ・フィロソフィの挑戦』（春秋社）刊行

編著：山田利明、河本英夫、稲垣諭

著者：長谷川真理子、隈研吾、松尾友矩、八木信行、武内和彦、福士謙介、住明正、大島尚、中北徹、山谷修作、中島晋、野村英登、横打理奈

・9日

### TIEPh 主催 シンポジウム（環境デザインユニット）

「天命はなお反転する 人間再生のための環境—荒川修作+マドリン・ギンズとともに」

パネリスト：河本英夫、花村誠一、池上高志

総合討論司会：稲垣諭、本間桃世

場所：東洋大学井上円了ホール

・16日

### TIEPh 共催 国際セミナー（自然観探究ユニット）

基調講演者：吉田敦彦（大阪府立大学教授）

報告者：岡野守也、ティム・マククリーン、中川光弘、竹村牧男

場所：東洋大学白山キャンパス6号館3階6317教室

・16日

### TIEPh 主催 シンポジウム（価値観・行動ユニット）

『妖怪学と環境問題—「お化け調査」は何を語るか—』

講演者：菊池章大、吉野諒三、真鍋一史

コメンテーター：堀毛一也、総合司会：大島尚

場所：東洋大学白山キャンパス6号館6302教室

・28日

### 活動報告会（評価委員会）

## I      —TIEPh 第 1 ユニット    自然観探求ユニット—

近代の科学は、精神と肉体を分離して、肉体を心臓を中心とする熱機関と理解することから始まった。この心身二元論によって、故障した部分はそこを分解し、あるいは部品を取替え、場合によっては取り去ることで機関全体の保全を図る技術が発達した。部品には精神が存在しないと考えたから、これが可能になったのである。

確かにこの心身二元論は、科学技術の発展に偉大な寄与をしてきた。しかし、それと同時に科学というもののあり方を、きわめて限定的な理解の下におくことになった。実証されないものを、存在しないものとして見ることである。ところが、この社会や自然界の中には、数値や理論で実証し得ない感覚上の存在や出来事がいくつもある。例えば、漢方薬や民間薬と称される一種の経験的医療にもとづいた薬物がある。つい一昔前まで、これらの多くは薬物の指定さえ受けられず、食品として扱われた。その成分の分析や薬効の数値が提示できなかったからである。鍼灸に至っては非科学的の一語で斥けられた。ところが、こうした経験的科学にもとづく技術や方法として、数千年にわたって蓄積された洗練されたシステムが存在する。

東洋の思想は、基本的には心身一如の立場に立つ。精神と肉体は一体化したもので、精神のあり方が肉体に反映する。実は、その精神は肉体だけではなく大自然にも感応する。あるいは精神のあり方が自然界にも及ぶというのである。ここまできると何やら胡散臭いという思いを抱く人もあろうが、利便性と豊かさを求めた人間の精神が、過剰な開発と修復困難な破壊を引き起こした事実をみれば、そのような東洋思想の意義や可能性について真剣に再検討すべきであることも肯けるであろう。

このユニットでは、西洋的価値観や科学技術が残した負の遺産に対して、東洋的な知の伝統がどのように関われるのかを検証し、そこから新しい発想と価値観の創造を図りたいと考えている。

## Ⅱ      －TIEPh 第 2 ユニット    価値観・行動ユニット－

人間の行動が環境の変化を引き起こし、その変化が人間自身の生存を脅かしているというのが現在の環境問題の一側面である。地球規模で生じている環境の悪化は人間の行動に起因しており、行動の背後にはそれを制御する心理過程が存在し、一方で環境問題を認識する心理過程も存在していることから、この問題の解決のためには心理学的な立場からの検討が重要であると考えられる。しかし、これまで心理学で環境の問題を取り上げる際には、周囲の環境が人間の行動にどのような影響を及ぼすかといった枠組みが中心で、自然環境のような大規模な環境の側面や、行動が環境に影響を与えるというような問題が取り上げられることは少なかった。実際、「環境心理学」の分野においても、どちらかといえば人工的な環境が行動や意識に及ぼす影響を調べるといった応用的な側面を中心に研究が行われてきた。したがって、「エコ・フィロソフィ」の構築と展開を目指す本研究イニシアティブにおいては、従来の心理学の研究手法や成果を踏まえつつも、新たな視点を導入した研究分野の確立が必要となっている。

そこで、われわれの研究ユニットでは、まず環境に対する人間の価値観の側面からこの問題を検討することにした。心理学的な立場から環境問題にかかわる行動を検討するには、その行動の背後にある個人の態度を明らかにする必要がある。態度は、個人ごとに比較的安定した傾向であるが、社会的な環境により変化する可能性を持っていることから、人々が環境問題の改善に向けた態度を形成し、行動するようになることが問題解決の手がかりになると考えられる。しかし、態度変化をもたらす要因は単純ではなく、個人ごとの価値観に依存する面が大きい。価値観は、個人の経験だけでなく、文化や民族、国家、宗教、世代、性別などによっても規定され、一般に多様性を前提として議論されることが多い。おそらく、環境に対する価値観も多様であり、むしろさまざまな価値観の存在自体が現代の環境問題を引き起こしてきたという側面もあると思われる。そこで、まずは多様な価値観の内容を理解することから始める必要がある。

次に、行動を規定する要因については、環境配慮行動を導く社会的構造に注目した研究として、社会的ジレンマの問題を取り上げる。個人の利益追求行動と、社会全体にとっての利益との相克を解決するための心理的要因の解明である。さらに、環境との調和を保ちながらの幸福追求のあり方の検討も重要なテーマとして取り上げる。

### Ⅲ -TIEPh 第 3 ユニット 環境デザインユニット-

発展するものは、創発し、成長し、頂点へと至り、そしてやがて衰弱していく。一切の生命に見られるこうした動向は、トインビーが指摘するように、文明にも文化にもみられる。こうした発展の仕組みは、持続可能性とは相当に異なるものである。持続可能性を分析すると、容易ではない問題が含まれていることがわかる。衰退し続けるものがただ衰退を遅らせている場合も、見かけ上「持続可能性」に彩られている。急速に発展してしまえば、やがて急速に衰退するシステムの場合には、急速な発展を抑制し、つねに発展の可能性を残しながら、展開の速度を遅くする場合にも、持続可能性が見られる。地球環境の持続可能性が叫ばれるさいには、極端な変化を引き起こしそうな要因を、制御し除去することが課題となっている。持続可能性が、ただ引き延ばすことではないのだとすると、持続可能性のもとで、人間の営みは何を実行すればよいのかという課題が生じる。持続可能性を設定した途端に、そのことの内実はなんなのかが問われるのである。

活力に満ち、創造性に満ちた持続可能性を想定してみる。これはどうすることなのだろう。たんにエネルギー消費、物質消費を抑え、つつまじやかな生活をするのではないはずである。経済成長がかりにほとんどゼロ成長であっても、なおより豊かな生活はありうるのである。このさいの豊かさとは何なのだろう。人間の創造性を発揮させ、生活に日々の彩りをあたえ、健康なものはより健康になり、どこか上達感のあるような工夫に満ちた生活はある。そうした場所や都市や生活圏を形成することはできる。このときデザインの方向を変えなければならないことがわかる。それぞれの場所で、つねに選択に直面でき、そこでみずからの行為をつうじてそれぞれの人が自分の回路を探し当てることができるような場所の設計が必要となる。システムは作動し続けているが、なおそれぞれの場面で、選択肢が増大し、工夫の別の可能性が見えてくるような設計は可能なのである。そこにシステム・デザインの構想が出現する。



「エコ・フィロソフィ」研究 Vol.7  
**Eco-Philosophy Vol.7**

平成 25 年 3 月 25 日発行  
編集：東洋大学「エコ・フィロソフィ」  
学際研究イニシアティブ(TIEPh)事務局  
〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20  
Tel : 03-3945-7934  
E-mail : ml.tieph-office@toyo.jp  
Homepage : <http://tieph.toyo.ac.jp/>